

結節点としての『廟』 —在日台灣人口コミュニティにおける東京媽祖廟の建立—

東京都市大学非常勤講師 鈴木 洋平
東京大学大学院農学生命科学研究科博士課程 前野 清太朗

はじめに

2014年9月21日。新宿区JR大久保駅近くのビルに数十人が集まっていた。ビルに掲げられた扁額には「東京媽祖廟」と記されている。今回人々が集ったのは、開廟一周年を記念したことであった。観衆の前で、東京媽祖廟理事長のX氏は「こんなに多くの来賓が台湾から、そして日本在住華僑の友が来てくれたことを嬉しく思います」と挨拶した。その後、4階建てのビルに祀られた神々の像に人々は思い思いに祈りを捧げた。東京媽祖廟開廟一周年式典には、国籍・地域・年代を異にするさまざまな人々がさまざまな理由のもとに行事を祝って訪れた。媽祖廟を訪れた人々の多様さは、30年以上前から媽祖廟建立に到るまでの経緯を反映している。「東京媽祖廟」とはいかにして形成され、今に至ったのであろうか。

媽祖とは、中国沿海部や台湾地域で多く信仰を集める女神で、航海や運送の安全にはじまり、現在では様々な人々の望みに応える神とされている。東京媽祖廟は媽祖を主神とし、ビルの階層ごとに異なる神像をまつた形式をとっている。1階は集会場兼事務室となっており、2階は台湾の北港から分靈された媽祖像、3階は中国大陆の湄州から分靈された媽祖像、4階には觀音菩薩像がそれぞれ祀られている。

移民として海外に移動した華僑・華人については、彼らを担い手として形成される「華人経済」と、彼ら華僑・華人のもつ「アイデンティティ」が二つの研究焦点となってきた（廖 2003:278）。華人社会の社会的・経済的関係をとらえるために注目されてきたのが、ネットワーク、あるいは関係（グワンシー）の概念であった（陳 1999:281-287）。このためネットワークあるいは関係（グワンシー）への着目は「華人特有の」関係構築への理解が中心目的とされてきた。着目の対象となったネットワークも、しばしば地理的制約を超えた人間関係であった。しかし、超地域的に見えるネットワークにあっても、特定の場を必要としないわけではない。現実の華人社会においては、族祠、会館、華人学校といった具体的な場が成立している（清水ほか編 2014）。華人社会が生み出す場とネットワークの関係性の分析により、地域におけるネットワークの具体的な発現形態の理解が可能となるのではないか。

本稿では、華僑・華人のネットワークの中から成立する場のひとつとして、廟をとりあげる。具体的には、2013年に建立された東京媽祖廟を対象に、建立を主導してきた日本媽祖会の活動を中心とし



図1 東京媽祖廟外観
(筆者撮影)

た在日台湾人社会における廟建立の形成過程を追う。次いで、そこに関わる人々のあり方について異なる立場から検討していく。日本在住の台湾出身者のいくつかの立場や、分靈元である北港の対応の中で、日台の関わりが続けられていく状況を説明する。台湾出身者の拠り所を目指して続けられた運動が、少しずつ異なる個々人の信仰心の集積により、廟としての実態を整えていく過程を紹介したい。

1章 東京媽祖廟の建立過程

前述した通り、東京媽祖廟を建立する際に最大の牽引力となったのが、1976年に台灣出身者を中心とし結成された日本媽祖会であった。日本媽祖会は日本での媽祖廟建廟を目的に、一時的な頓挫や仮安座を繰り返しながら、大久保の東京媽祖廟に結実するまで、様々な計画を実施してきた。本章では建廟計画に到る過程について、その概要を紹介する。

1.1 日本媽祖会の設立

1978年、日本媽祖会は正式に発足した。会の発足に合わせて、主神となる媽祖像が準備された。台湾では新たな廟を開く際、以前から存在する有名な廟から靈力を神像に分けてもらう「分靈」「分香」と呼ばれる習慣がある（高橋 1993:34-35）。日本媽祖会では、神像を台湾の雲林県北港鎮にある朝天宮から分靈した¹。神像は発足パーティーの行われた東京大飯店の一室に仮安座された。東京大飯店の社長のL氏は在外華僑の代表として立法委員をつとめた人物であり、華僑総会とも縁の深い人物であった。L氏は自ら会の発足に関わるとともに、東京大飯店専務であったG氏に事務的な折衝を委託した。G氏は建設予定地としてL氏が有していた伊豆山荘の空き地を候補に挙げた。しかし日本媽祖会の法人格としての整備が済んでおらず、さらに実務を担当したG氏が早逝してしまったこともあり、この時の計画は頓挫した（日本媽祖会 2009:33）。媽祖廟建立の計画は進まなかつたものの、この時に分靈元である北港朝天宮へ「進香」が始められた。進香とは、分靈元の廟と分靈先の廟との神像により行われる行事で、日本媽祖会により2014年現在も続けられている。



図 2 分靈先の一つ北港朝天宮（筆者撮影）

1.2 箱根での媽祖廟建立計画

創会初期の計画失敗の反省を踏まえ、進香を続けながらより日本の地域と連携した形での建廟計画が模索されていった。その過程の中で媽祖廟建立計画が浮かび上がってきたのが、箱根にある曹洞宗寺院である福寿院だった。

台湾には日本統治期からの曹洞宗系統の寺が残っていた。彰化県にある清水巖寺もその一つであり、住職は駒沢大学の出身で、福寿院住職のZ氏と同窓であった。寺の跡継ぎがいなかったZ氏は、1976年

¹ 北港朝天宮は台湾でも有数の媽祖廟として知られる。北港は、日本媽祖会会長となったI氏の出身地でもある。

に清水巌寺と姉妹寺の関係を結んだ。清水巌寺からは二人の尼僧が派遣され、経営の手伝いを行った。東京大飯店のG氏は生前、伊豆山荘での計画が頓挫したのち、台湾と交流のあった福寿院へ媽祖像を安置してもらっていた。こうした台湾との縁もあり、台湾出身者は福寿院への参拝を行っていた。

現在の住職であるM氏が福寿院に派遣されたのが1989年のことであった。檀家がなく、運営の安定についても委託されていたM氏は、福寿院内を確認する中で、媽祖像を発見した。M氏によれば、媽祖像が明らかに仏像ではないことには気付いたものの、当初は何の神像であるかわからなかつたという。机に出しておいたところ、横浜から来ていた台湾出身者から「こんな扱いをするなんて」と涙を流して抗議されたという。日本媽祖会の会長であったI氏も、媽祖像の扱いを心配し訪れ、あらためてM氏・Z氏とI氏をはじめとする日本媽祖会の人々との交流が開始された。

これに前後して、当時の中華民国総統李登輝が日本媽祖会の活動を聞き、『聖德東伝』と記した扁額の会への寄付を申し出た。李登輝の名代として訪れた李登輝の実父である李金龍に、日本媽祖会会长のI氏は日本に媽祖廟を建築したい意思を伝えた。これを聞いた李金龍は、ぜひ日本で行われる扁額の贈呈式に訪れたい、とI氏に打診した。当時李金龍は92歳と高齢だったこともありI氏も半信半疑であったが、李金龍の来日計画は本格化していく。

日本媽祖会でも李金龍を出迎える計画を進め、日本国内にある各種台湾出身者の団体に連絡した。福寿院住職のM氏も李金龍来日の準備を呼びかけ、扁額寄贈の記念式典と記念行列を「箱根觀音媽祖菩薩祭り」の名称で実施することとした。祭祀に用いる各種の道具は台湾から購入し

一部は分靈元である北港朝天宮から寄贈された。箱根住民により李金龍の名前にちなんだ金色の龍踊りの人形も造られた。地元の神輿会をはじめとする地域住民が台湾の人々から踊り方を習い、出迎えの準備を行った。

こうして初年の「箱根觀音媽祖菩薩まつり」は成功裏に終わった。箱根側からは有志により日本式の神輿と法被が北港朝天宮に寄付され、北港で日本式神輿をかつぐ祭祀団体の金懿順（3章2節で詳述）が設立された。

箱根側、福寿院側としては、日台交流、さらには国際交流の祭りとしていきたいという思いがあり、人々による手弁当の協力が続けられた。祭の開催時には宗教宗派を問わず各国の留学生がボランティアで参加した。地元住民による台湾への交流団の派遣や、媽祖の脇侍である千里眼・順風耳の人形の作成も行われた。1997年までの7年間にわたり「箱根觀音媽祖菩薩まつり」は続けられた。

祭の開催に並行して、福寿院での媽祖廟建立も具体的な計画が進められていったものの、最終的に管理主体等の問題が解決せず、廟の建立には到らなかった。現在も箱根福寿院内に「媽祖菩薩祭壇」



図3 「箱根觀音媽祖菩薩まつり」の宣伝チラシ（箱



図4 箱根有志による北港朝天への日本式
神輿贈呈（北港媽祖志工団提供）

として媽祖像が祭られている。

1.3 小岩での東京朝天宮仮安座

箱根での計画が頓挫したのち、日本媽祖会では日本各地にある媽祖を祀る神社や寺などとの交流を進めながら、媽祖廟建立の機会を模索した。中でも、江戸時代に天妃（媽祖）像が遷座したとされる青森県大間町稻荷神社との交流は現在も続いている。大間町では1996年に天妃像遷座300周年だったことを記念した「天妃様行列」が始まられ、今に至っている。

交流活動の拡大を続けながらも土地の確保が問題となり、廟建立の目処は立たなかった。I氏は、まずどのような形であっても一般の人々が参拝可能な場所を作りたいと考えた。開廟にあたっては、寄付を受けるための法人格が必要なことが問題となった。そのため、将来的な宗教法人化を目指しながら、日本媽祖朝天宮という一般社団法人を設立することになった。

こうして開廟の準備が整い、I氏の親戚から借り入れた小岩にあるビルの一室に「仮安座」の形で「東京朝天宮」が作られることになった。開廟に際して北港朝天宮よりあらためて二体の神像が分霊されるとともに、廟に必要な祭具一式が購入された。I氏と同郷であり、以前よりの知人でもあったK氏を代理住持に迎えることで神像と住持が揃い、廟としての形式が整えられた。

小岩での仮安座によって、仮とは言え信徒が集まる場所ができた。その結果、台湾系メディアなどにも取り上げられ「社会的信用も高められた（日本媽祖会 2009:4）」。信徒集団の「護持協賛会」も結成され、廟としての求心力が高まった。小岩は海に近く、海運の神でもある媽祖廟を設けるのに適切とされ、近辺での土地が探されたが、条件が整わず仮安座のまま6年程度が経過した。



図 5 東京朝天宮への媽祖像分霊式
(北港媽祖志工団提供)

1.4 大久保での東京媽祖廟建立

廟の建立を決定的にしたのが、日本中華聯合総会会長のX氏による土地と資金源の提供であった。X氏は、以前より日本媽祖会幹部との交流もあり、最終的に媽祖廟建立のスポンサーとして、大久保の土地と廟の建設費の大部分を提供した²。X氏の負担により廟建立が決まったことで、日本媽祖会やI氏も建設の方針についてはほぼX氏の意志に一任することになった。

こうした背景から、東京媽祖廟建立後の活動は、次世代へと移りつつある³。日本媽祖会は、当初の目的であった建廟を果たしたことで、媽祖に対する信徒団体としての活動を続けている。管理経営の

² X氏は北港の出身ではなく、南投県水里郷の出身である。

³ かつての日本媽祖会では、台南会・台中会、李登輝友の会などの日本統治期台湾からの引き揚げ者、一般日本人も参加していた。台南会や台中会などについては一世世代高齢化もあり、二代目に当たる人々が中心となっている。

人選はX氏に一任され、X氏から委託されたY氏などにより平常の廟管理が行われている。廟管理のボランティアについても、護持協賛会のメンバーや、自ら廟を訪れた人によりまかなわれている。台湾の廟の管理者にあたる役職の炉主、頭家に当たる人物は、まだ正式に置かれていない。

現在の東京媽祖廟管理の中心人物であるY氏は、台湾新聞のインタビューで次のように語っている。

一番大事なのは、心の交流です。ビジネスではありません。東京媽祖廟は営利目的で造られたものではありません。皆様の心をどうしたら温めることができるかが肝心なことですし、心の拠り所になって欲しいと思います⁴。

過去の建廟模索の時期と同様、現在の東京媽祖廟においても、各人の心の拠り所としての場所の確保が引き続き重視されている。新たな世代が運営管理の主体を担いつつある中で、初期の日本媽祖会の人々が望んでいた日本における台湾出身者の人々が集まる媽祖廟の建立が実現した。

2章 媽祖廟建立と個人

東京媽祖廟成立に到る過程の中で、繰り返し重視されていたのが人々の集まる場所としての廟建立であった。本章では、東京媽祖廟建立の過程に関わった人々が、どのような背景を持っていたのかを、三人の関係者の異なる立場から検討する。日本在住の台湾出身者のいくつかの立場や、分靈元である北港の対応の中で、日台の関わりが続けられていく状況を説明したい。

2.1 日本媽祖会会长、I氏（90代、男性）

I氏は北港出身者である。同郷者の伝手を頼って来日してからは、苦学しつつ様々な事業を行ってきた。日本での公私の活動の中で、心の拠り所となったのが、故郷北港の朝天宮に祀られた媽祖であったという。個人的に媽祖像の分靈を行い、家庭内で祀ってきたI氏は、在日の北港出身者をはじめとする台湾出身者が心の拠り所とできるような媽祖廟建立を目指した活動を行い、それが日本媽祖会発足の契機となった。東京媽祖廟建立に向けた動きの中心人物であり続けてきたI氏の日本における、日本媽祖会と東京媽祖廟に関わる活動を紹介していきたい。

I氏は1920年代の雲林県北港鎮（当時の台南州北港郡北港街）に生まれた。日本本土へ向かうきっかけとなったのは、北港出身の先輩で早稲田大学に通っていたQ氏であった。Q氏の弟で、I氏と同年齢のB氏が日本へ行ったことを聞き、自分も日本で何らかの成功をつかみたいと考えるようになったという。教育を受けて日本語を喋ることが可能であったことも後押しとなった。I氏の母は日本へ行くことに反対したため、地元の名士であったQ氏兄弟の父に依頼し説得した。こうして数え年で14歳に当たる1935年、I氏は日本へ向かった。

来日当初は、友人でもあったQ氏兄弟の住むアパートに、Q氏弟のB氏と同居していた。学業のブ

⁴ 「東京媽祖廟代表 Y さんインタビュー」(<http://blog.taiwannews.jp/?p=16914> 2013年10月29日掲載) 台湾新聞ホームページより引用。

ンクを取り戻す必要があったため、水道橋の研数学館に1年間通った。その後、目白商業学校の夜間学校へ編入し、目白台近辺にあった中外製薬で働きつつ通学した。学校卒業と同時に中外製薬を辞職し、終戦後に中華料理店を開いた。当時は、戦中期に神奈川県金沢で工場に動員されていた台湾の人々が日本におり、北港出身者も数名、空襲を避けて東京近辺に来ていた。店員などの雇用は北港出身者でまかなかったという。中華料理店での利益を基にして豊島区を中心に各種事業を営んだ。練馬に居を構え日本人女性と結婚、子供が生まれた。1970年代半ば頃から、日本政府と中華人民共和国の国交回復に伴い中華民国と日本政府の国交断絶問題が生じ、在日台湾人の中に日本国籍を取得する動きが生まれた。I氏も、家族とともに日本国籍を取得している。事業の関係で与野市（現さいたま市）へ転居し現在に至っている⁵。

I氏を中心に1976年に発足したのが日本媽祖会である。日本媽祖会は日本で事業を行う台湾出身者を中心としてスポンサーを募り、数度の頓挫を経ながら媽祖廟建立計画を続けてきた。また、北港朝天宮に対する進香団を主催する団体の一つとして、故郷や朝天宮との繋がりを保つ役割も担った。I氏が朝天宮との繋がりによって媽祖への信仰を深めたことは、I氏自身が故郷との関係を深めていくことにも繋がった。故郷である北港に対して活動を続け、北港市街の河沿いには事業で得た利益の一部で東屋を寄贈するなどしている。

戦後の日本を中心に活動を続けてきたI氏が、日本媽祖会を結成することになったのは個人的な背景によるものであった。I氏によると、来日前は廟などに特別興味を持ってはいなかったという。

私は14～15（歳）で日本に来たからね、大人の社会は知らないんだ。さっぱり知らないの。…
関心ないの。大人の社会だからね。何の神様かもわからない。たくさん神様いるからね。何にも知らないで来たからね。お袋さんと一緒にお参りに行くときは、お袋がこうやってるから一緒にやるだけね、どういう神様か知らないの⁶。

母に連れられて廟へ参拝していた程度で、I氏にとって廟とは「大人のもの」であった。
I氏が廟に関わる契機となったのは、家族の難病であった。1970年代前後の医療技術にあっては治療困難とされる病気で、I氏も心労で白髪になってしまったほどだったという。余命半年と宣告された家族を連れ、手の施しようもないまま、I氏の故郷である北港を訪れた。

あと（余命が）半年しかない（と宣告された）から、薬がない、医療法もない、当時はね。そういうわけでね、じゃあ、最後に私の実家は台湾ですから、…台湾に連れて行って媽祖さんに伺い立てたの。朝静かな時にね。雨降ってた時に、媽祖さんに、この子は医師の診断によってあと半年しか命がないと宣告されたけれども、どんなもんでしょうかと。なんて言うの、

⁵現在はI氏の長男が同地で歯科医院を経営している。また二人の孫は歯科医、産婦人科医となっている。

⁶以下、本節の引用はI氏への日本語で行われたインタビューより抜粋。カッコ内は筆者による。

くじびき、みくじをポエ⁷してね、二回も三回も。それで、最後に、解説してくれたわけですよ。その解説者が言うにはね、この子は今、半年で死ぬようなみくじではありません、と。ちょっと見てごらん、今（外は）雨降ってるでしょ、と。雨降ってるということは、みくじ（の内容）はね、（舟が）山のてっぺんに来ている（という内容な）わけですよ⁸。で、まだ（今、外が）雨降っているということは、また下がる、舟が降りてくる可能性があると。これが天気だったら（晴れいたら）、山のてっぺんに残っちゃつたら、これで、もう水がだめだ、と、そういう解説で。私もね、今の医学が進歩しているのに、まだ薬がないのでね、半信半疑で聞いてたんですね。結局、この子は、すぐ死ぬようなみくじではありません、と。今、雨が降ってるでしょ、だから舟が降りる可能性がある、と。だから心配要りませんよ、と言われたんですよ。私もちよつと半信半疑で。ところが、やっぱり、信じざるを得ないですよ。…それで、半年経っても死はない。一年経っても、二年経っても、とうとうね…半年で亡くなるって言われてたのが、30歳くらい命が延びたかな。というわけで、まるつきり媽祖さんがウソついたわけじゃないんだな。ちゃんと将来まで生きてくれて。それが一つの動機でね、媽祖信仰になつた。

故郷にある北港朝天宮で神の意志を確認したところ、意外にも「必ずしも死を意味する内容ではない」とのくじが出た。最初は半信半疑であったものの、朝天宮の主神である媽祖に加護を願つたところ、病状が安定し医師の診断よりも長く生きることができた。I氏自身の身辺に生じた経験が、朝天宮の媽祖を分霊して自宅に像を置き個人的に祀るきっかけとなっている。

I氏は北港朝天宮との関わりを維持しながらも、自身の経験もあり、日本に来て苦労している在日台湾出身者が日本にいながら媽祖を拝むことが可能な場所を作ることを祈念するようになっていった。その理由について、I氏は以下のように語っている。

あそこで祀り始めた理由。やっぱりね、家に置いたんじゃ誰も知らないの。…華僑の人にはやっぱり色々な悩み事があるでしょ、求職時期や家庭の問題とか子供の教育問題とかね、色々何か抱えているわけですよ、悩み事が。…華僑はどうしても孤立の生活ですから、悩み事もいっぱいあるわけですよね。媽祖さんにいろいろお祈りしたり、媽祖さんに向かって心からはき出して、こういう悩み事、みくじもあるから、気が楽になるでしょ、いくらかでもね。そういう目的で、廟を作ったわけです。みんなの悩み事を軽くするために。神に祈って、心がすっとする。

⁷ 廟などにおいて神の意志を判断するための道具の一種。片方の面が膨らみ、もう片方の面が平らな半月形に近い二枚の木片を利用する。一組になっている二枚の木片を投げ、その表裏によりみくじなどの判断を行う。

⁸くじ（靈籤）の原文は「命内正逢羅李閔 用尽心機總未休 作福問神難得過 怡是行舟上高灘」。

このように、在日台湾出身者の抱える心理的問題を少しでも和らげられる場を作りたい、という思いが、日本に媽祖廟を造ることを目的とした日本媽祖会の活動へとつながっている。

小岩における東京朝天宮仮安座も、I氏が主導したものである。I氏の親族に依頼してビルの一室を提供して貰っている。その際も、あくまで「仮安座」であることにこだわり、正式な安座場所としての廟建立を求めるコメントを発している（日本媽祖会 2009:4）。あくまで、I氏の希望は媽祖廟の正式な建立にあったと言える。現在は、東京媽祖廟理事長の職にあるが、自身の役割は廟建立で完了したとしており、理事長も名目上のことであると述べる。東京媽祖廟の管理運営はX氏に一任する形で、時折廟を訪れている。

2.2 金懿順会長、H氏（60代、男性）

I氏が媽祖廟建立に向けて奔走する中、分靈元である北港朝天宮への進香は継続的に行われてきた。進香における朝天宮側の受け入れ団体として機能したのが「北港朝天宮金懿順媽祖轎班会（以下金懿順）」であった。金懿順は北港朝天宮の祭祀組織で、1991年にS氏が設立し、現在の会長はH氏が勤めている。設立当初の147人から、2014年現在で名簿上210人を数える。組織は「組」と呼ばれる5つの団体に分かれ、各組に組長がいる。組長は各構成員への連絡係を担う。金懿順への参加呼びかけは組長が行うため、各組ごとで構成員の数に差がある。参加地域は朝天宮のある北港を中心としながら、雲林県・嘉義県の他地域から参加する人々もいる。毎年の活動費用は主に会員からの年会費（1000元）でまかなわれている。朝天宮での祭祀に用いる衣服などの消耗品については、理事長が個人的に負担している。

日本式神輿が箱根福寿院から北港朝天宮に送られたことが、金懿順結成のきっかけとなった。当時、北港獅子会（ライオンズクラブ）は箱根ライオンズクラブとの交流を行っていた。獅子会で活動していたS氏が初代理事長として祭祀団体としての金懿順を結成した。S氏は箱根時代の媽祖廟建立計画にも積極的に関わり、3度にわたって箱根觀音媽祖菩薩まつりに参加している。現会長のH氏夫婦が金懿順と関わるきっかけとなったのも北港獅子会の活動であった。H氏の生まれば北港鎮に隣接する雲林県水林郷である。兵役後に北港へ移り住み玉石販売業を営んでいる。夫婦ともに獅子会に参加していたことをきっかけに、まずH氏の妻が金懿順に加わり、のちにH氏自身も参加するようになった。

金懿順は、日本媽祖会が北港を訪れる際の受け皿としての役割を担ってきた。北港出身者であるI氏が親族を通して連絡を入れることで、金懿順や北港朝天宮から日本へ人を派遣するなどの手配も行ってきた。東京媽祖廟の落成式にも北港から金懿順のメンバーをはじめ39人が参加し、会の名義で10万元を寄付している。金懿順は日本媽祖会が進香団としての形式を整える上で不可欠な存在であった。

一方で金懿順は、あくまで朝天宮に対する祭祀団体としての活動を中心してきた。箱根から送られた日本式の神輿や法被は、他の祭祀団体と金懿順の性格の違いを明確に示すものとして効果的に機



図 6 金懿順が発行している会員用冊子（北港朝天宮金懿順媽祖轎班会提供）

能している。毎年旧暦3月23日に行われる媽祖祭祀の際には、朝天宮傍の文化大楼に置かれた神輿の中に媽祖像が移され市街を練り歩く。台湾とは異なる形の神輿を担ぐことに反対はなく、むしろ中心となっていた獅子会のメンバーは他の祭祀団体との違いを喜び、箱根の神輿会から担ぎ方や歩き方の指導を受けたという。日本式の神輿を積極的に取り入れながらも、台湾の祭祀団体が用いる旗や提灯を付け加えるなど自分達での改良も行っている。北港における金懿順の主要な立場とは「日本式の神輿などを特徴にした祭祀団体」と言えよう。H氏にとっても、金懿順は北港にある複数の祭祀団体の一つとして認識されている。H氏は金懿順以外にも、三太子会と土地公会という異なる祭祀団体に参加している。祭祀団体の他にも消防団や太極拳の会の会長を務めるなど、地元の活動の多くに積極的に参加している。H氏にとって金懿順に参加することは、H氏がつとめる北港の団体活動の一つである。

日本と北港での位置付けの違いが生まれる背景には、東京媽祖廟と北港朝天宮の関係が「進香」という関係を取っていることが関係している。進香は、分靈先の廟から分靈元の廟を訪ねる形を取り、時に、「神の里帰り」などとも称される。そのため、北港側の組織である金懿順にとっては、東京媽祖廟の存在は、あくまで分靈先である。分靈元である北港の代表として、金懿順は日本側の人々を出迎えていると考えられる。

2.3 日本馬祖文化協会代表理事、K氏（80代、男性）

I氏は建廟の主体として、日本における台湾出身者のための廟建立を主導してきた立場であり、H氏は北港代表として日本からの進香を受け入れる立場を担ってきた。この二者とはやや異なる立場から日本媽祖会と媽祖廟建立の活動に関わり、日本における媽祖廟としてのあり方について模索を行っているのが、K氏である。K氏は、仏教研究者としての活動の一環として、日本における媽祖廟建立や媽祖信仰の普及に独自の立場から関わってきた。I氏・H氏・K氏の活動の多面性は、そのまま台湾における廟という存在の多面性を示すものと言える。

K氏は1930年代の生れで、北港郊外の集落出身である。13歳の時、現台南市關子嶺にある碧雲寺で出家し、戦後しばらくは高雄県の寺に身を寄せていた（呉老撢 2006:20）。1947年に台南の竹溪寺へ移り住み、6年間にわたって寺の管理運営に努めた（呉老撢 2006:24-25）。21歳からは新竹に行き、中国大陆から台湾へ来た印順法師から本格的に仏教を学ぶ機会を得た。その際に中国語も学んでいる⁹。

新竹で8年を過ごした後、1961年、30歳でより専門的に仏教学を学ぶことを志し日本留学を決意した。当初の留学費用は竹溪寺と竹溪寺が属する開元寺、そして故郷の北港朝天宮が負担した（呉老撢 2006:179）。同郷出身のI氏が来日時の保証人となり、その後日本で交流を続けることになった。

向学心の強かったK氏は、駒澤大学では大学編入ではなく学部から入学し、ペーリ語と原始仏教を学ぶ中で自己の関心を深めていった。その結果、当初予定していた滞在期間を超過することとなり、奨学金も打ち切られてしまった（呉老撢 2006:179）。仏教学を学び続けたいと考えたK氏は、還俗して様々なアルバイトで生計を立てながら苦学を続けた。1965年には大学院に進学し、同年に台湾の埔

⁹日本統治時代の台湾の人々は、母語であるビン南語や客家語、原住民諸語のほか、共通語として日本語教育を受けており、中国語を習得する機会は少なかった。

里出身の女性と結婚した。K氏の義父も日本留学経験者であったことが縁になり、結婚することになったという¹⁰。大学院では働きながら仏教学を学び続けた。その後、大学での非常勤講師を勤める中で日本国籍を取得。妻とともに子育てをしながら、中華料理の惣菜店や薬局で生計を立てた。

K氏は現在、生活のほとんどを日本で過ごしている。故郷に親族や一族の墓もあるが、自身が末子であり、ほとんど行くことはないという。I氏とは異なり、北港と故郷としての関係を積極的に構築しているわけではない。K氏と台湾との関係で、軸となっているのが仏典研究による人間関係である。K氏を中心として、高雄市内の元享寺と連携して1986年に開始されたのが、「南伝大藏經」の漢訳プロジェクトであった。台湾時代の師である印順法師を顧間に迎え、大学時代の恩師である水野弘元氏の協力も得ながら、パーリ語仏典の漢訳を15年にわたり行った（呉老訖 2006:277-279）。かつては元享寺の仏学研究所所長も勤めており、現在は職を辞しているが、元享寺との関係は今も続いている。以上のように、K氏の主たる経歴は仏教研究者としてのものである。

日本媽祖会においても、K氏が北港出身者でもあったことから、初期の活動から参加を続けてきた。日本における媽祖廟建築計画に具体的に関わることとなったのが、小岩での東京朝天宮仮安座計画の際であった。北港朝天宮から媽祖像の分靈を行うなどの行事に、代理住持として参加している。以降、小岩に仮安座が行われていた時期に、東京媽祖廟完成までを代理住持として過ごしている。

K氏が力を入れてきたのが、日本における媽祖研究の進展である。媽祖に関する研究が中国大陆や台湾におけるものを中心としており、日本に来た媽祖に関する研究があまり進んでこなかったことに對して、K氏は貢献したいと考えていた。小岩時代に、K氏を代表理事とした一般社団法人日本馬祖文化協会が2007年に設立された。2014年の協会パンフレットでは「日本の天妃（マソ）様の寺社、宮廟と一層緊密に連携し、媽祖文化を推進致したく存じます」と書かれている。日本各地の媽祖を祀るとされる寺社・廟を巡り「媽祖觀音像」の配布などを行う予定であるという。協会の運営方針にも、日本での媽祖信仰普及への意志が示されている。協会参加者は台湾出身者に限定されではおらず、パンフレットにも中国語・日本語が並記されている。「媽祖文化」の理解を高めることを目標した勉強会、K氏による講演会を定期的に開催している。研究の成果として『媽祖文化源流考』という本を中国語でまとめており、日本語でも出版を予定している。K氏は以下のように述べる。

観音様も、インドから中国に来る時に変わった。髪の毛も変わった。着物も変わった。だから媽祖も変わってもいい¹¹。

K氏の活動は、台湾における分靈元である北港朝天宮を軽視するものではない。K氏は、台湾や中国本土から分靈してきたという背景は重視しながらも、各地の状況に合わせた媽祖のあり方を肯定して

¹⁰義父は自身の経験から、K氏の子供達に台湾語を教えさせなかった。台湾語を覚えることで、日本語のイントネーションが崩れることを危惧したためだという。そのため、K氏の親族は台湾では英語で会話している。K氏の状況は、台湾出身者の持つ複雑な言語環境を反映したものと言える。

¹¹K氏への日本語で行われたインタビューより抜粋。

いる。日本全体の媽祖に関連する施設との連携も意図しながら、新たな媽祖廟である東京媽祖廟と、日本における時代的幅を持った媽祖信仰とを繋げることをめざしている。

おわりに 結節点としての廟

以上のように、東京媽祖廟の建立過程と、それに関わってきた中心人物の活動を検討した。第1章では、媽祖廟成立を目指した日本媽祖会の活動と、数度にわたる挫折を経て現在の東京媽祖廟完成に至る経過を紹介した。伊豆、箱根、小岩、大久保と建廟計画が推移していく過程で、日本媽祖会がとった立場はそれぞれ異なったものであった。1970年代、日本媽祖会は結成時の人脈から伊豆での建廟を計画したが諸問題により挫折した。その後、台湾出身者を中心とした北港朝天宮への進香団体として活動を続け、1980年代末には初期に分霊した媽祖像による箱根福寿院での建廟計画を進めた。同時に日本媽祖会は「箱根觀音媽祖菩薩祭り」のサポート役もつとめた。箱根での計画頓挫後は、北港朝天宮への進香を維持しつつ、日本各地の媽祖関連の寺廟との連携を進めた。さらに、小岩での仮安座により日本国内での知名度を高め、土地・資金面の問題を解決し得る方法を得て、現在の大久保での建廟にいたった。建廟を終えた現在は、媽祖に対する信徒団体としての活動を続けている。

日本媽祖会の果たした役割は様々であるが、いずれの時期にあっても共通していたのが、日本に台湾出身者が集合し得る心の拠り所となる廟の建立という目的であった。こうした長期の活動の中で、媽祖廟建立計画を維持してきた人々の意志は、個々人が持つ信仰を集める場の必要性、すなわち日本の地にあることの必然性を推進力として維持されてきたといえよう。

以上のような歴史を経て、現在の東京媽祖廟が造られるにいたった。こうした30年以上にわたる歩みが、日本媽祖会に関わり、数度にわたって分霊されてきた複数の媽祖像の居所にも示されている。

① **I氏自宅の媽祖像**： 日本媽祖会結成のきっかけともなったI氏個人の経験の中で分霊してきた媽祖像。30年前にI家に分霊され主に個人宅で祀る目的としてきた。小岩での仮安座の際、新たな媽祖像が分霊されるまでの間、廟の主像としても扱われていた。現在では、ふたたびI氏宅に置かれている。

② **箱根福寿院に置かれた媽祖像二体**： 1976年、日本媽祖会結成時の計画に合わせ分霊されてきた媽祖像は、伊豆での建廟計画挫折後に箱根福寿院へ預けられた。のちに箱根での媽祖廟建廟計画が進められる中で、1990年頃に新たな媽祖像が分霊された。現在もこの2体の媽祖像が、箱根福寿院内に安置されている。

③ **東京媽祖廟の媽祖像2体**： 小岩での東京朝天宮仮安座に伴い、北港朝天宮より新たに分霊されてきた媽祖像。廟の主神である東瀛媽（鎮殿媽）と、進香時に信徒によって運ばれる新京媽（進香媽）の2体が同時に分霊されており、いずれも東京媽祖廟の2階に安置されている。

こうした多彩な媽祖像の存在が、東京媽祖廟が様々な背景を持つ人々の活動の中で、今に至るまでの事情を物語っている¹²。廟が建てられるまでに集まつた、個別的な人の「信仰」が累積する中で廟としての立場が固められていった。

¹² これら媽祖廟として祀られた媽祖以外にも、I氏が個人的に媽祖像を祀っているように、公開してはいないものの、個人や集団で媽祖を分霊してくる例は多い。

第2章では、東京媽祖廟建立に関わりを持つ三者の活動について検討した。I氏、H氏、K氏はいずれも、東京媽祖廟や媽祖に対してそれぞれ少しづつ異なった認識や目的のもと、活動を行っている。I氏の立場は、日本側から媽祖廟を建てたいと考える人々の意志を代表している。一方、H氏の立場はこうした日本側の要請に対する台湾側の受け入れ方を示すものとなっている。すなわち、I氏に代表される個人の意思としての信心に発した台湾出身者のエネルギーが廟をつくる必然性を牽引してきた。H氏に代表される台湾（北港）側は台湾出身者のエネルギーを自らの文脈の中で位置付けるものとして金懿順を成り立たせてきた。K氏は新たな日本における媽祖廟のあり方を模索することで、新たな人々を媽祖廟に引きつけてきた。このように三者は異なる方向性を持ちながらも、いずれもが東京媽祖廟を成り立たせる原動力となってきた。

以上の検討からも示されているように、場所の計画は数度にわたり移動しながら、いずれも信徒が集まる簡便な場所の確保が重視されてきた。たとえ建廟という具体的な形を取れなかつた時期においても、人々は進香などの活動を通して日本と台湾をつなぐ信仰のエネルギーを維持することで、媽祖廟に人々が集まるための道筋を作ろうとしてきた。多様な要望、目標を持つ人が集積する結節点として東京媽祖廟が成り立っている。場所としての廟と、個々人の信仰心が集約することで、はじめて廟としての実態が整うのである。今後、廟のあり方と、人々のエネルギーの奔流がどこへ向かうのか、引き続き注目していきたい。

【参考文献】

- 郭慶文編（1993）『大甲媽祖停止往北港進香史料彙編』笨港媽祖文教基金会
- 吳老撅口述、卓遵宏・侯坤宏取材、周維朋・王千蕙・莊豐吉整理（2006）『台灣佛教一甲子：吳老撅先生訪談錄』国史館
- 吳老撅編著（2014）『媽祖文化源流考』財團法人北港朝天宮
- 清水純・潘宏立・庄国土編（2014）『現代アジアにおける華僑・華人ネットワークの新展開』風響社
- 高橋晋一（1993）「巡礼のネットワーク—台湾の「進香」を事例として」『しにか』第4巻9号
- 陳天璽（1999）「華人研究とネットワーク論」飯島涉編『華僑・華人史研究の現在』汲古書院
- 日本媽祖会（1996）『涛』第18号、日本媽祖会
- 日本媽祖会（2004）『日本媽祖会創立二十五周年記念特刊』日本媽祖会（私家版）
- 日本媽祖会（2009）『日本媽祖会創立三十周年記念特刊』日本媽祖会（私家版）
- 北港朝天宮金懿順媽祖轎班会（2011）『北港朝天宮金懿順媽祖轎班会第一届第二次會員大會手冊』北港朝天宮金懿順媽祖轎班会
- 北港朝天宮金懿順媽祖轎班会（2014）『北港朝天宮金懿順媽祖轎班会第三届第一次會員大會手冊』北港朝天宮金懿順媽祖轎班会
- 松根豊潔（1991）「箱根觀音の媽祖祭」『大法輪』第58卷第6号
- 廖赤陽（2003）「在日中国人の社会組織とそのネットワーク—地方化、地球化と国家」游仲勲先生古稀記念論文集編集委員会『日本における華僑華人研究』風響社